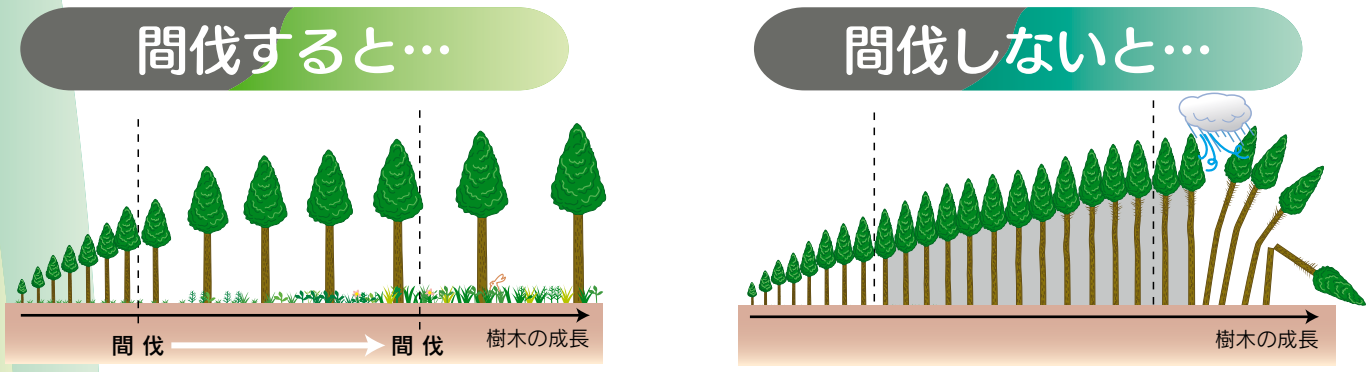


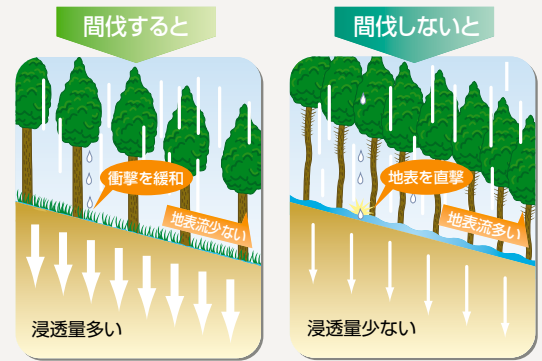
# 間伐は森林づくりの基本

間伐は、木々の成長により混み合った森林の木の一部を伐って本数密度を調整する作業です。間伐を行うことにより、残った木々の成長を促すだけでなく森林の公益的機能の維持・増進に役立ちます。間伐は、健全な森林づくりの基本作業です。



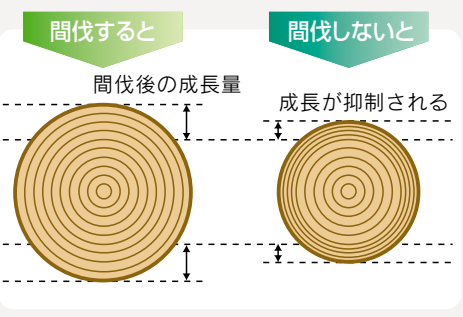
## 間伐は森林の環境を豊かにします。

間伐を行わず暗くなった森林では、地表がむき出しとなり、雨などとともに表土が流れ去ってしまいます。間伐を行うことによって林内に光が入り、下層植生が生え、表土の流出が抑えられます。このように、森林の土壌が健全に保たれることにより、雨水の浸透量や保水量も多くなるため、水源かん養機能が維持・増進されます。



## 間伐は森林の価値を高めます。

- ① 病害虫、風雪害などに対して抵抗力の高い健全な森林となります。
- ② 幹の直径成長を促し、年輪幅の整った、利用価値の高い木材を生産します。
- ③ 曲がり木やあばれ木などを除き、まっすぐで良質な木材を生産します。
- ④ 主伐までの間に、比較的短い期間ごとに収穫できます。



## 間伐は地球温暖化防止に貢献します。

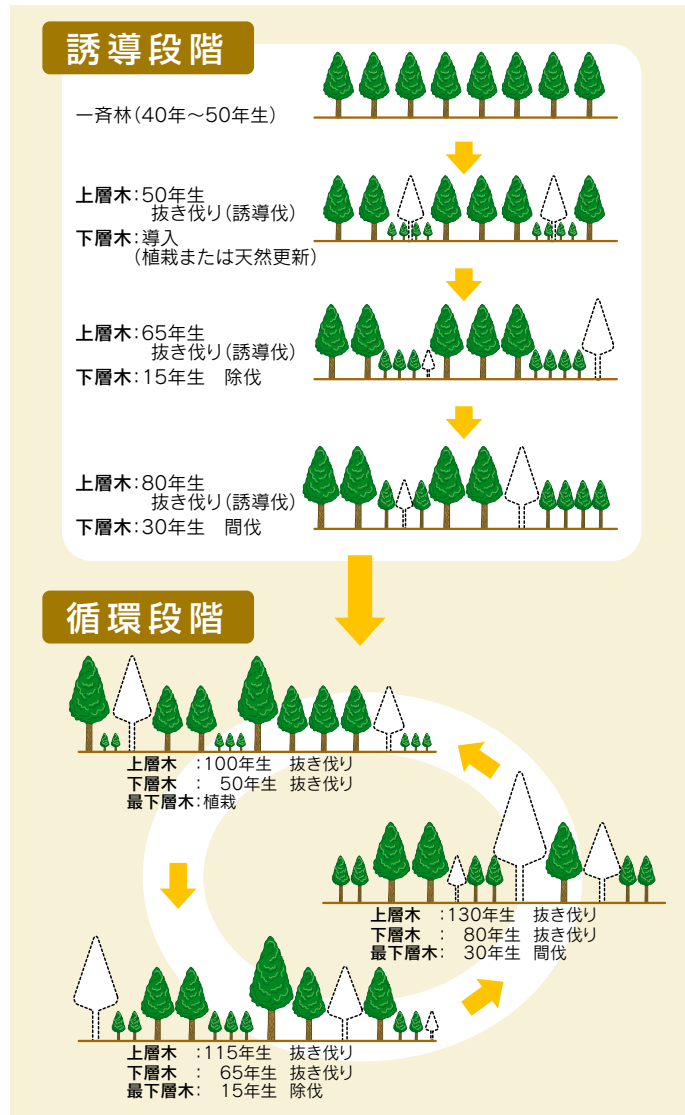
(独) 森林総合研究所の調査によれば、適切な間伐を実施した森林は、間伐未実施の森林に比べ、伐採木を含めた森林バイオマス全体の二酸化炭素吸収量が多くなるとされています。さらに、京都議定書における森林吸収量としてカウントされるには、平成2年以降に間伐等の手入れが行われている必要があります。このため、間伐を実施することは、京都議定書の目標達成にも貢献します。

# 育成複層林施業の推進

森林の木を伐採するとき、一度に全部伐らずに必要な分だけ抜き伐りし、その跡に若い木を育て、年齢や樹種の違う木で構成される複層状態の森林をつくることを育成複層林施業といいます。このような森林は、大きな木を伐採しても小さな木が残り、常に林地が樹木で覆われるため、森林のもつ様々な機能を持続的に発揮できます。

我が国の人工林は、伐期に達した人工林が急増することから、これら全てを伐採するのではなく、森林を健全な状態で維持し、資源を循環させていくことが重要です。このため、一定の林齢に達している人工林を対象に、抜き伐りや苗木の植付けなどによって、長期の複層林へと誘導する長期育成循環施業を推進しています。

## 長期育成循環施業の例



### 重視する森林の機能に応じた森林タイプ

#### 水土保持タイプ(単木型)

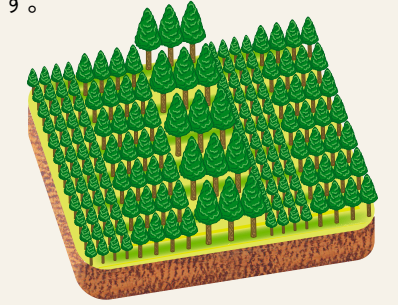
将来にわたり、水源かん養や災害防止の働きが大きい森林をつくります。



- 単木での抜き伐り(単木型)が理想です(小面積の帯状、群状も可)。
- 伐採率は40%以下とします。
- 広葉樹の導入など、多様な森林づくりを心がけていきます。

#### 循環利用タイプ(帯状型)

将来にわたり、くり返し木材資源を生産する森林をつくります。



- 効率よく施業を進めるため、最大で残存木の樹高の2倍の幅までの帯状・群状の抜き伐りができます。
- 伐採率は50%以下とします。

- 補助の対象**
- 適切な密度管理と下層木の健全な育成のための、46年生～90年生の人工林における誘導伐(抜き伐り、伐採木の搬出、枝払い)
  - 上層木が46年生以上の人工林における苗木の植付け
  - 下層木の育成のための下刈り、除伐、間伐等
  - 作業道等の開設